

年会特別企画



提供: 講談社

科学に潜む宗教的思考の危うさ

日 時: 11月30日(金) 11:40~12:30

会 場: 第1会場(パシフィコ横浜 1階「メインホール」)

座 長: 石野 史敏(東京医科歯科大学難治疾患研究所)

佐藤 優

(作家・同志社大学神学部客員教授・元外務省主任分析官)

理性を思考の根源に据える近代において、宗教は後景に追いやられた。しかし、科学者を含め人間には、合理性には還元できない「ひらめき」のようなものを重視する傾向がある。特に思考のパラダイムが転換しつつある時代状況において、新しい学説は、当初、虚偽の言説であると拒否される傾向がある。このことは、ガリレオ・ガリレイの地動説に対するローマ・カトリック教会の態度、ハイゼンベルクの量子力学に対して「神はサイコロを振らない」といって、最後まで忌避反応を示したアルベルト・アインシュタインの例を見れば明白だ。

その故に、パラダイム転換につながるような新学説との触れ込みで、客観的根拠をもたず実証不能な言説が流通してしまうことがある。STAP細胞をめぐる騒動がその一例である。あるいは汎用性を持つAI(人工知能)が自身の力で、人間の知能を凌駕する技術的特異点(テクニカル・シンギュラリティ)が近未来に到来するという、数学的公理系から考えて不可能な事柄を信じている科学者もいる。

これらの現象は、無自覚のうちに科学者の思考に宗教が入り込んでいるから起こる。この状況を認識するためには、近代的な学知が成立する以前に力を持っていた錬金術や「有限な事柄が無限をとらえることができるか」という16世紀のルター派とカルバン派の論争など、一見、近代的な科学とは関係のないように見える人類の知的営為から学ぶ必要がある。

そこから浮かび上がるのは、周囲の磁場を変化させてしまう独特な人心掌握力を持つ人がいることだ。このような人が、科学の世界に入ってきた場合、想定外の事態が発生することがある。科学に従事する人々が、どのようにして、無意識の領域を操作するような人の危険性を察知するかという問題について、この講演では踏み込んで考察してみたい。

略歴

1960年1月18日 東京都生まれ

1978年 埼玉県立浦和高等学校卒業

1983年 同志社大学神学部卒業

1985年 同志社大学大学院神学研究科修了(神学修士)

1985年 外務省入省

英国の陸軍語学学校でロシア語を学び、その後、モスクワの日本国大使館、東京の外務省国際情報局に勤務。外交官勤務のかたわらモスクワ国立大学哲学部で弁証法神学を講義し、東京大学教養学部で民族問題を講義する。

2002年5月に鈴木宗男事件に連座し、東京地検特捜部に逮捕、起訴され、無罪主張をし、争うも2009年6月に執行猶予付き有罪確定。2013年6月に執行猶予期間を満了し、刑の言い渡し効力を失った。この逮捕劇を「国策捜査」として描いた『国家の罠—外務省のラスプーチンと呼ばれて』(新潮社、2005年)は、大きな波紋を呼び、毎日出版文化賞特別賞を受賞。『自壊する帝国』(新潮社、2006年)が新潮ドキュメント賞、大宅壮一ノンフィクション賞を受賞した。